

「生きられた新宿」に迫るための大都市の解説手法の開発と実践

—1975 年新宿「経験図」の再読と現代的更新—

初田香成^{※1} ジョルダン・サント^{※2} 中島直人^{※3} 宮園侑門^{※4} 森屋友佑^{※5}

本研究は、1975 年のニューヨーク近代美術館「The Phenomenal City Shinjuku」展で展示された 12 枚の「経験図 experience map」を再読し、大都市の解説手法を開発・実践することで、現代の「生きられた新宿」に迫る。1975 年展についてインタビューや当時の資料を収集し評価を探るとともに、50 周年にあたる 2025 年に現在の新宿を表現する展覧会を行った。展覧会では「経験図 2025」や新宿の経験を振り返る「新宿クロノロジー」といった展示物を作成し、『生きられた新宿論考集』の出版、関連イベントを行った。

研究背景と目的

1970 年代の新宿駅付近は、政治運動や芸術・演劇から消費の場へ徐々に変容し、ポストモダンを体現する都市と目されていた。1975 年にはニューヨーク近代美術館 (MoMA) で「The Phenomenal City Shinjuku」展（以下 1975 年展）が開催され、12 枚の「経験図 experience map」が展示された。哲学者・評論家の多木浩二が真壁智治らと協働し、日常的に新宿を通過する人々の行動と感覚を大型図面と写真、モンタージュなどを通じ記号的に分析したもので、時代を先取りする表現だった。本研究は同図に学びつつ大都市の解説手法を開発し新たな表現を試みることで、現代の「生きられた新宿」に迫る。「生きられた新宿」とは多木からヒントを得た概念で、人間の経験が織り込まれた空間を意味する。

現在の新宿は 1960 年代に整備されたインフラの再開発が進展し、都市像を描き直す時期に来ている。そこでは「経験図」を生かしつつ、半世紀の経験が蓄積された空間を歴史的に評価することでスクラップ&ビルド的な発想を脱するとともに、近年進

展の著しい計測・表現技術を用い更新することが求められている。

具体的には 50 周年にあたる 2025 年に 1975 年展の凱旋展示を行うとともに、現在の新宿を表現するマルチメディアの展示を作成する。その際に「2025 年の新宿の経験」と「経験図の現代的再読」をテーマに、「経験図 2025」として多木浩二のアプローチを現代的に適用して現代の新宿における人々の経験のリサーチを行い、「新宿クロノロジー」として 1925～2025 年に至る新宿の都市経験を記述する。そして 1975 年以降の経験の変化と次の 50 年の新宿の可能性を探る視座を提供しようとするものである。

研究成果と考察

上記の目的を達成するため、2025 年 11 月に「生きられた新宿」と題した展覧会を行った。以下では 1.1975 年展覧会について、2.展覧会に向けた事前作業として (1) 当時の関係者へのインタビュー、(2) ニューヨークの GLUCK+事務所での資料収集、3.展覧会での作業として (1) 展覧会の概要、(2) 各大学研究室による「経験図 2025」

【様式 2】

の作成、(3) 新宿の歴史と現在を振り返る「新宿クロノロジー」、(4) 関係者や研究者による『生きられた新宿論考集』、(5) 関連イベント、4.今後の課題について報告する。

1. 1975 年展覧会について

1975 年展では 12 枚の「経験図 Experience Map」などを通じて、新宿駅周辺の姿が展示された。経験図の作成には真壁智治、入江経一、片倉保夫、鈴木明、伊藤善康、田中政明らが関わっていた。

同展の内容は P・クラック／ヘンリー・スミス「Shinjuku」(『A+U』3 巻 8 号、1973 年 8 月)と多木浩二「都市の経験 記号分析学の次元として」(『新建築』1976 年 3 月号)で一部が紹介されている。新宿は前者では近代主義的都市計画の対極として、後者では都市への現象学的アプローチを具体的に展開する場として紹介されている。

当時の展覧会の評判や位置づけについては後述の『論考集』のサンドによる論考が詳しい。サンドによれば MoMA では同時期にエコール・デ・ボザール建築の回顧展が開催されており、ポストモダニズムが建築・都市計画界で主流になった当時、それぞれポストモダニズムの過去と未来の側面を示唆するように機能したという。

2. 展覧会に向けた作業

(1) 当時の関係者へのインタビュー

2024/4/4 にニューヨークの P.グラック事務所でピーター・グラック氏へ、2024/6/27 に工学院大学で当時経験図を作成した真壁智治氏、鈴木明氏へ図の作成過程や多木浩二氏などについてインタビューを行い、いずれも動画に記録した。このほかにもインタビューを次の通り行った。

- ・ヘンリー・スミス氏 (2025/2/17)
- ・真壁智治氏 (2025/6/25)
- ・入江経一氏 (2025/11/3)

(2) P. グラック事務所での資料収集

ニューヨークで GLUCK+事務所、ヘンリー・スミス氏 (コロンビア大学名誉教授)を訪ねた。GLUCK+事務所では 12 枚の経験図のうち 6 枚が現存すること、展示構想に関するメモ、写真、当時の批評記事などを確認し、段ボール箱数箱の資料を借りだし、アーカイブ化した。



H. スミス氏と P. グラック氏

3. 展覧会での作業

(1) 展覧会の概要

展覧会では WHITEHOUSE (百人町)の「Parallax City」、王城ビル (歌舞伎町)の「状況」劇場、工学院大学 (西新宿)の「都市の経験 1975-2025」という性格の異なる 3 つの会場を計画した。三者がそれぞれの都市コンテキストの読解と表現手法を用いながら全体として「生きられた新宿」を描き出そうとした。以下では助成の主対象である工学院会場について述べる。



工学院会場の様子

【様式 2】

〔日程〕10月25日(土)・11月16日(日)
工学院大学新宿キャンパス地下 B-1CHI
(MoMA 展原資料公開) 早稲田大学早稲田キャンパス 14 号館 1 階
連携: BENTEN 2
キュレーション: 宮園侑門
参加: 工学院大学榎原徹研究室、同初田香成研究室、慶應義塾大学ホルヘ・アルマザン研究室、東京大学都市デザイン研究室+早稲田大学有志、東京理科大学伊藤香織研究室
協力: 鈴木明、Henry Smith、Peter Gluck (GLUCK+)、真壁智治、早稲田大学空間映像研究室、Don O' Keefe
会場構成協力: 園部莉菜子
アートディレクション: おおつきしゅうと、川島大地

(2) 経験図 2025 の作成

多木浩二の論考「都市の経験 記号分析学の次元として」をもとに、1.場所の多元化 一個人と経験、2.規制と自発、3.環境の現像と知覚、4.欲望・消費と記号、5.空間と秩序という5つのテーマを抽出し、参加を呼び掛けた研究室にテーマを割り振った。各研究室は現代の新宿における人々の「経験」についてのフィールドワークを行い、次のようなスケジュールで「経験図 2025」を作成した。

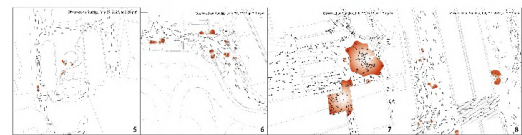
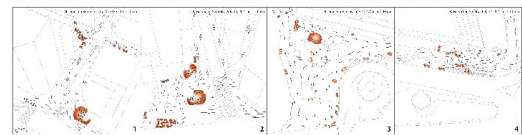
2025/4/24 スタートセッション

2025/6/25 中間発表・モックアップ

2025/8/3 最終発表

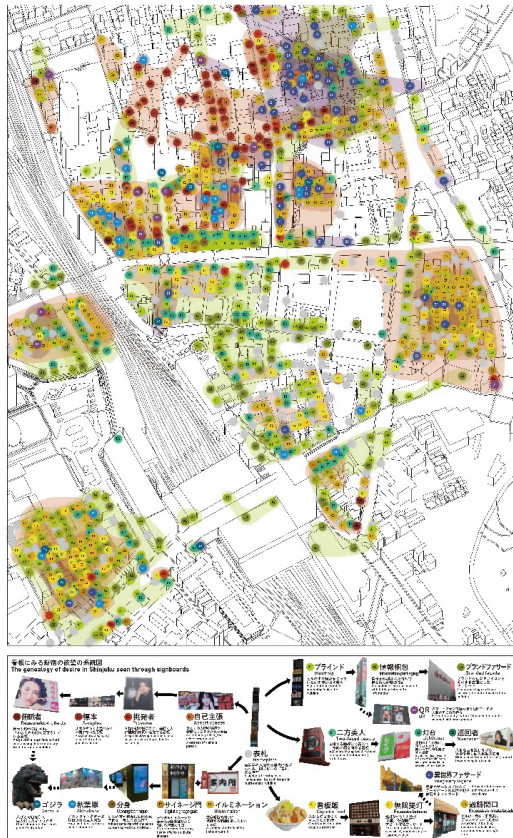
テーマの分担と各研究室の展示物は次の通りである。1.東京理科大学伊藤香織研究室「偏光の集積」「断片の複層」、2.工学院大学榎原研究室「漂流可能性」、3.東京大学都市デザイン研究室+早稲田大学有志「都市の余白に浮かび上がる「踊り場」、4.同「看板は語る、新宿の欲望」、5.慶応大学ホルヘ・アルマザン研究室「抵抗の層: 公益へ

の偏りが組み込まれた都市構造を新宿で探る」。以下では3と4について取り上げる。



東京大学都市デザイン研究室+早稲田大学有志 「都市の余白に浮かび上がる「踊り場」

「完成してわずか3年の新宿西口地下広場が「通路」に認定され、反戦集会で集っていた人びとを解散させるうごきがあったのが1969年。多木浩二が新宿を描いたのは、「日本の広場」の存続をかけた議論の熱が冷めやらぬ時期だった。人の集う「広場」と、足を止めてはならない「通路」という鋭い対立は、しかし現在の新宿においては曖昧になり、屋外は脱政治的・日常的な空間となった。とはいえ、そこに積極的な意志はないにせよ、新宿では人の足を止める空間が、各所で生じては消えている。この地図では、新宿に無数に存在する駅の出入り口と商業施設の分布に着目して「磁力線」を可視化し、その磁場の乱れるところに現れる刹那的な場を描写した。階から階へ、目的地から目的地へと移動する「間に見出される空間」という意味で、これらを〈踊り場〉と呼ぼう。」



東京大学都市デザイン研究室＋早稲田大学有志
「看板は語る、新宿の欲望」

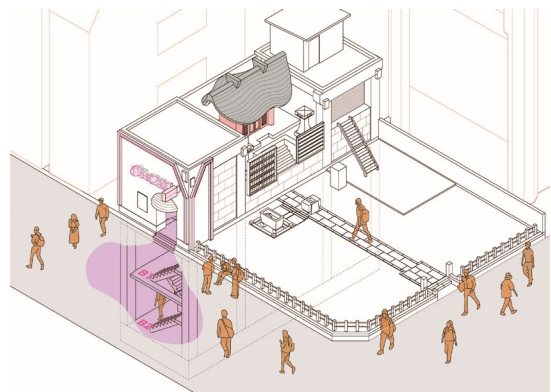
「多木浩二が描こうとした新宿の欲望の地図の代わりにここでは欲望を生み出す機構としての新宿を描く。多木は新宿の欲望を「ショッピング」「飲食」「娯楽」「セックス」の4つに分けて、地図に示した。この地図では新宿の風景をかたちづくる様々な看板に目を向け、その表現の仕方によって系統を整理した。系統の出発点となるのは雑居ビルの袖看板だ。これらは「そこ」にある店舗の情報を、「通りがかる人びと」に向けて示しているという意味で「表札」という比喻で理解できる。それに対して、建物上部に取り付けられた看板は、店舗の情報を「それを視認できる遠くの人びと」に投げかけているという意味で、「灯台」と呼べるかもしれない。5つの系統と、いくつかの突然変異によって説明できる新宿の看板は、欲望と風景の相互関係を表現している。」

(3) 新宿クロノロジー

工学院大学初田研究室は新宿の百年間の経験を知覚、欲望、操作に分けて概観する「生きられた新宿」年表と、新宿のアーバンニズムを特徴づける空間として、1975年の展覧会もとりあげた駅・地下街、雑居ビル、広場について次のような展示物を作成した。

「新宿駅地下空間比較図 1933-1973-2025」、「新宿駅複合空間図 2025」、雑居ビルのイラスト（弁財天ビル、思い出の抜け道」ビル、ヨドバシカメラ西口本店）、広場のイラスト（アルタ前、トー横広場、新宿西口地下広場）

この百年は資本主義化と公共空間の管理が一貫して進展してきたが、新宿はそれに対抗する人々の新たなふるまいや交歓を生み出してきた。1975年展から50年後の現在、この間の経験を踏まえ新宿のアーバンニズムとして位置づけようとしたものである。



新宿駅複合空間図 2025(上) 弁財天ビル(下)

【様式 2】

(4) 『生きられた新宿論考集』

展覧会に合わせて 1. Shinjuku 1975、2. 新宿のクロノロジー、3. 生きられた新宿という三部からなる論考集を作成した。当時の関係者と展示物作成者に加え、アーティストや建築家、都市デザイナー、社会学者、美学者に次のような寄稿を依頼した。寄稿に際しては 1975 年から 2025 年への新宿の都市のイメージと実態の変容の解明が目的であり、1970 年代の都市論的試みを検証することで、現代の都市論や都市へのまなざしそのものを逆照射し、その今日的課題を浮き彫りにするような原稿を依頼した。

経験図再考 1 Peopled Streets (人間のみち) 遠藤新
経験図再考 2 Daily Rhythm (デイリーリズム) クリスチャン・ディマー
経験図再考 3 Regulation and Spontaneity (時間から見た場所の性質) 武岡暢
経験図再考 4 Bubbles and Thorns (泡と棘・知覚的な空間像) 石毛健太
経験図再考 5 Individual Turf (個人の環境像) 青田麻未
経験図再考 6 Underground Disorientation (地下空間の記憶) 近森高明
経験図再考 7 Front and Back (おもてとうら) 吉村有司
経験図再考 8 Microspatial Packaging (マイクロ・スペースとパッケージング) 南後由和
経験図再考 9 Contours of Consumption (消費記号の分布) 木村絵里子

(5) 関連イベント

展覧会の関連イベントとして右段に挙げたイベントを行った。

3. 今後の課題

今後は展覧会の図録を作成・出版するのが課題である。図録については展示物の図

版に加えて、多木、グラック、スミスの当時の論考を再録するとともに、論考集の増補改訂を行いたいと考えている。

□オープニング・シンポジウム

2025 年 10 月 26 日 (日) 13:30-16:30 早稲田大学大隈小講堂

パネル 1 MoMA 展と新宿の歴史を振り返る

司会:ジョルダン・サンド (ジョージタウン・國學院大)、ヘンリー・スミス (コロンビア大)

×真壁智治 (M.T.VISIONS) ×初田香成 (工学院大) ×ホルヘ・アルマザン (慶應義塾大)

パネル 2 2025 年「新経験図」の挑戦

司会:宮園侑門 (アムステルダム芸術大)

榎原徹 (工学院大) ×中島直人 (東京大) ×吉江俊 (東京大)、コメント:真壁智治

パネル 3 写真・映像の新宿 1975—2025 年

司会:佐藤洋一、中川道夫 (写真家) ×齋藤直紀 (GROUP/東京大学)

□生きられた新宿展ギャラリートーク

・工学院大学会場ギャラリートーク #1 都市の断片化、漂流、踊り場を巡って

10 月 30 日 (木) 19:00~20:30

伊藤香織 (東京理科大) ×榎原徹 (工学院大)

×中島直人 (東京大)

・工学院大学会場ギャラリートーク #2 都市の抵抗、欲望、時間を巡って

11 月 5 日 (水) 19:00~20:30

ホルヘ・アルマザン (慶應義塾大) ×吉江俊 (東京大) ×初田香成 (工学院大)

参考文献

Yasutaka Tsuji, “Displaying the Phenomenal City: The Installation of the 1975 Shinjuku Exhibition at the Museum of Modern Art in New York” (East Asian Architecture in Globalization, Springer, 2021).